Vol.5 ●とじこみスペシャル

COMICS & NOVELS!!

FANTASY LAND

ファンタジーランド



新コーナー登場!!

RPGやAVGのようにハラハラドキドキコンピュータ・ゲームよりも面白いコミックスや小説が読みたいっ!! そんな欲ばりなあなたのために 今号よりスタートです!!

CONTENTS

ウィザードリィ外伝　第2部
鳳凰の塔 3
作/石垣環

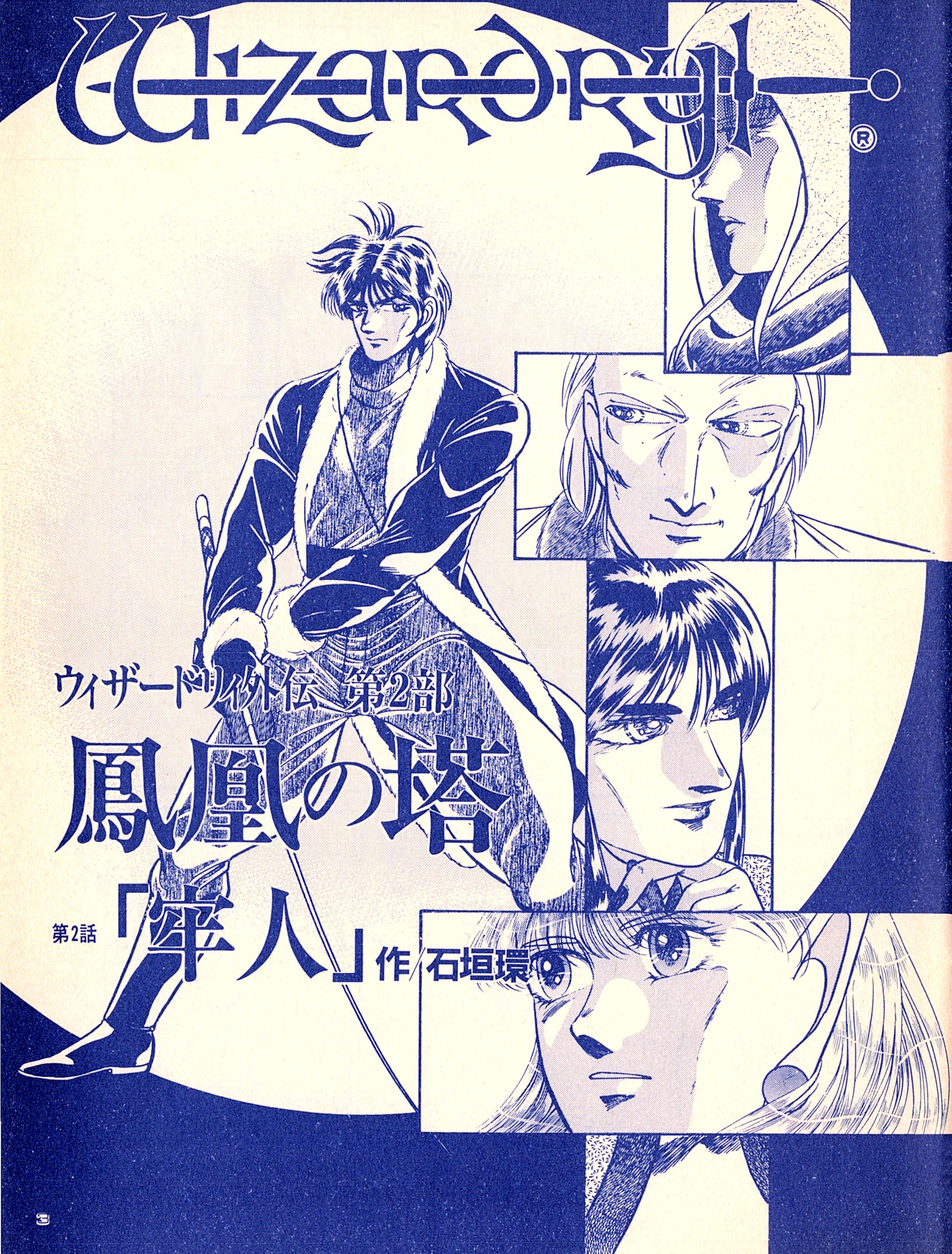
〈コラム〉スーパーブックガイド
この本を読め!! 28
柴尾豊太郎

DRAGON LORE ドラゴンロアー
最後の竜に捧げる歌Ⅱ 29
作/外薗昌也
原作/手塚一郎

スーパーギャグコミック
品川KIDの **死んでしまうとは何事じゃ** 46
作/品川KID

小説ウィザードリィⅡ
風よ。龍に届いているか 49
作/ベニー松山
イラスト/高橋政輝

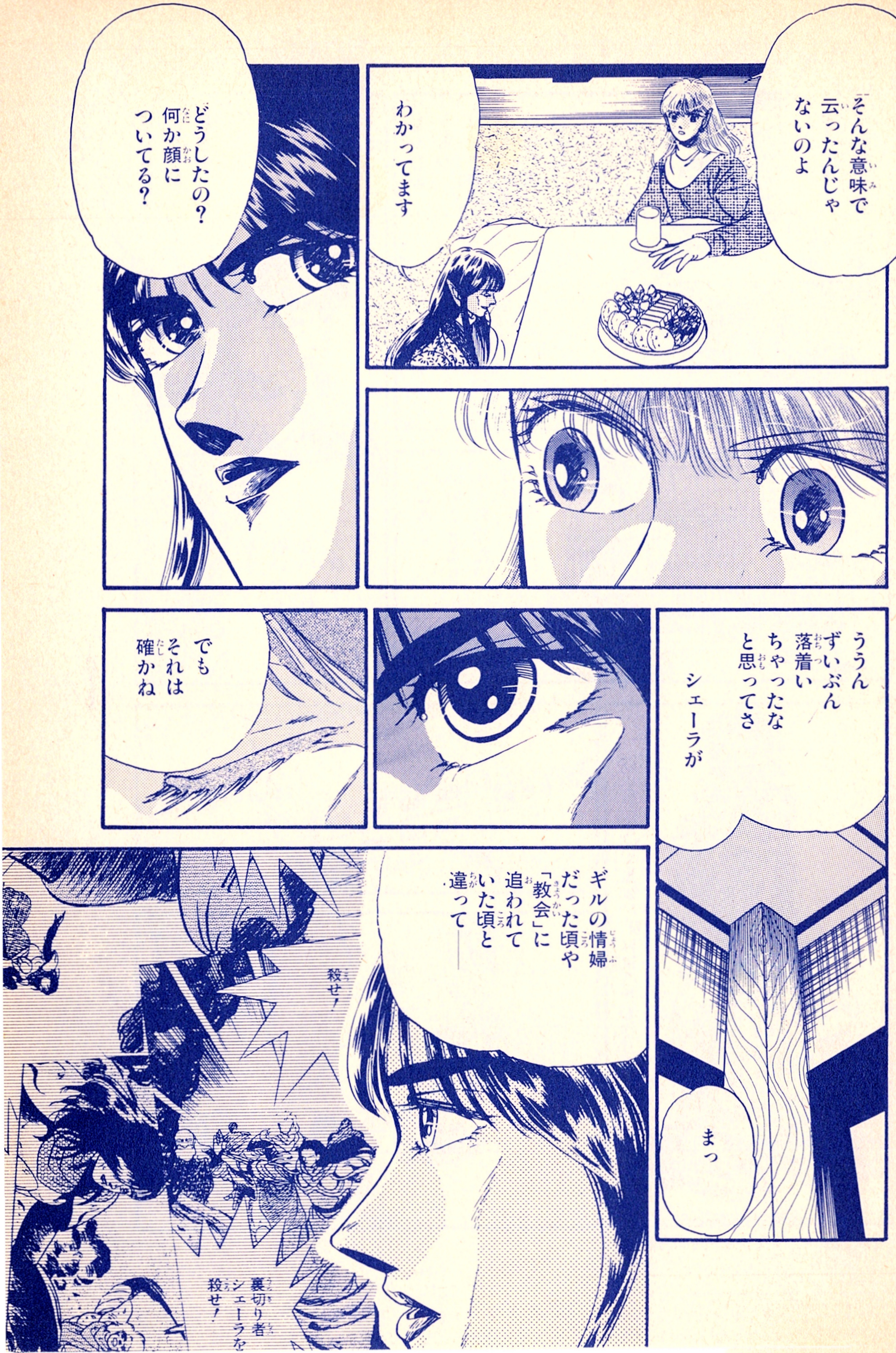
FANTASY LAND



Wizardry®
ウィザードリィ外伝　第2部
鳳凰の塔
第2話「牢人」作/石垣環



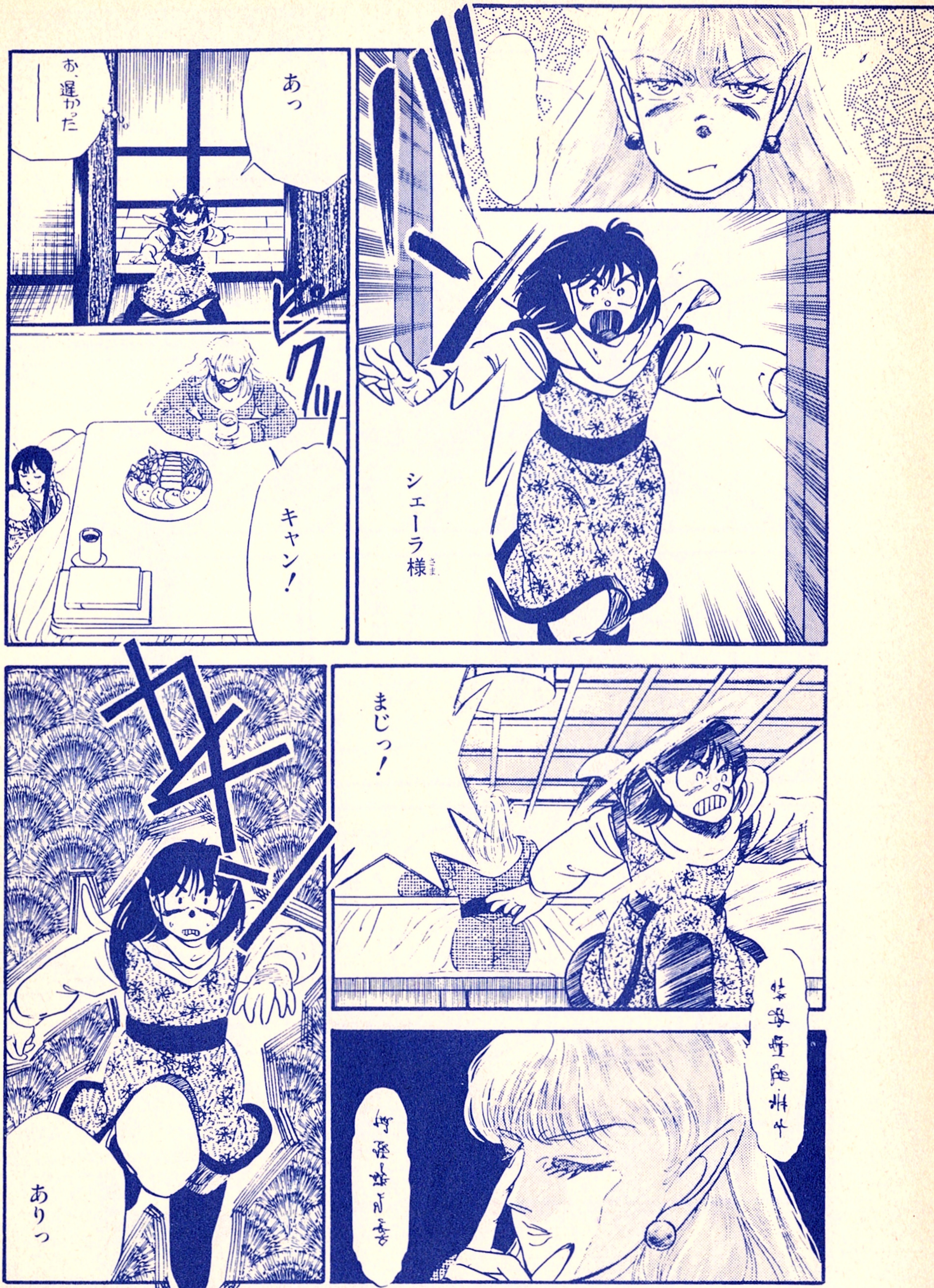
*「ホウライ」では「ロード」の職に就く者は、自国の王族の者に限定されており、他国の「ロード」は排斥される。この物語の時点では、「王」不在の時代である。

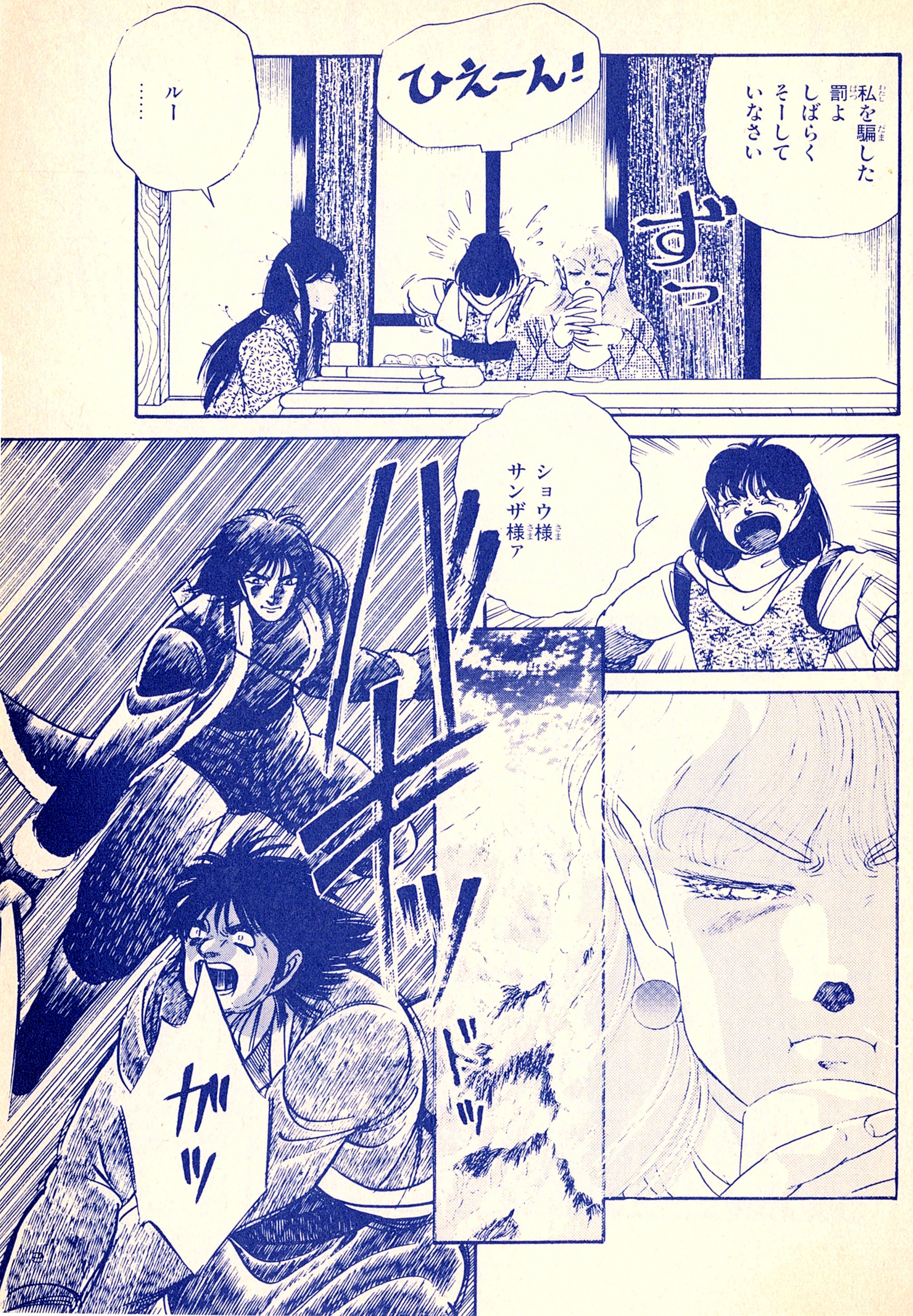

そんな意味で云ったんじゃないのよ
わかってます
どうしたの？何か顔についてる？
ううん ずいぶん落着いちゃったなと思ってさ シェーラが
でもそれは確かかね
まっ
ギルの情婦だった頃や「教会」に追われていた頃と違って――
殺せ！
裏切り者シェーラを殺せ！



＊「ルー」はルーシィディティの呼称。


な 何だろ
この不快な
感じ――
へ、へへ
冗談は
よしてよ
50年前は
敵よ!
とっくに
あの戦争は
終わってるわ
それに
2つ年下よ
あいつ
うちは
10才以上
離れてる
わよ


バン
シェーラ様
あっ
お、遅かった――
ピクッ
キャン！
まじっ！
キャン
ありっ


私を騙した罰よ しばらくそーしていなさい
ずっ
ひえーん!
ルー……
ショウ様サンザ様ァ
ドドッ
ガバッ


ガッ
ドッ
追い剝ぎに成り果てた牢人か——
峰打ちだが
スッ
——足りん
俺たちを狙うにはちょいと腕が——


カアーッ
サンザ！跳べ!!
何！


ゴッ
へ……へへへ.
ヨロッ
す、すっげえ威力だぜ


誇りを捨てても習った甲斐が
その剣術
誰に教授されたか話してはくれないか?
何!
ヨロッ
ヨロッ
ふう 危ねえ 危ねえ
ば、ばかな……

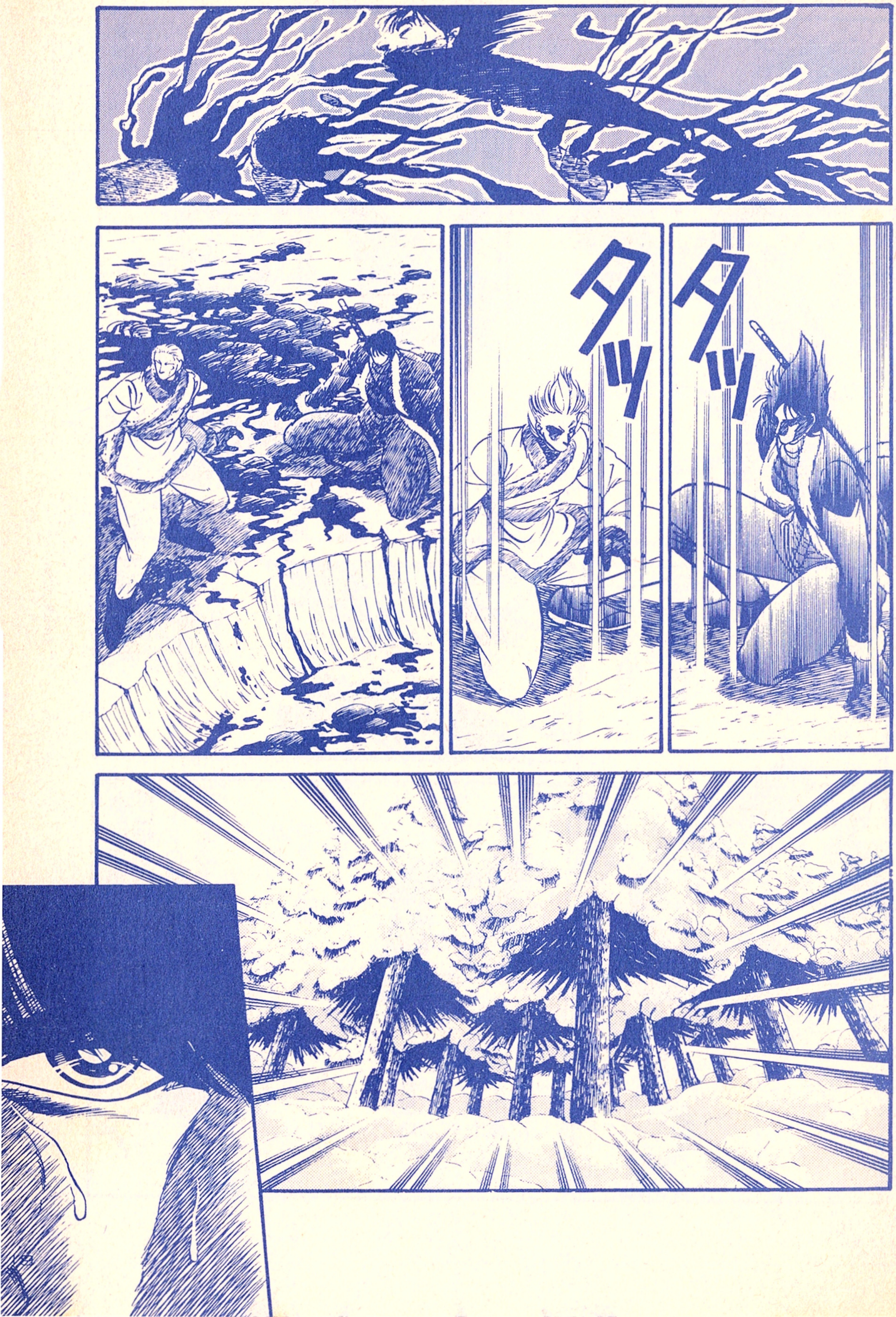

こなくそ――!
ショウ!
鳳龍円月斬




す、すっげえ


本来なら手足はとうに失ってるはずだが
多少加減しておいた
ボタッ
ドクッドクッ
生命まで取ろうとは思わない
ただ先程の剣術をあんたに教えた相手について――
話してもらいたいだけだ
ボタッ
ドクッ
うっく
ボタッ
そうすれば手当てもする
金をやっても良い
スッ
わ、わかった
い、云う




タッ
タッ

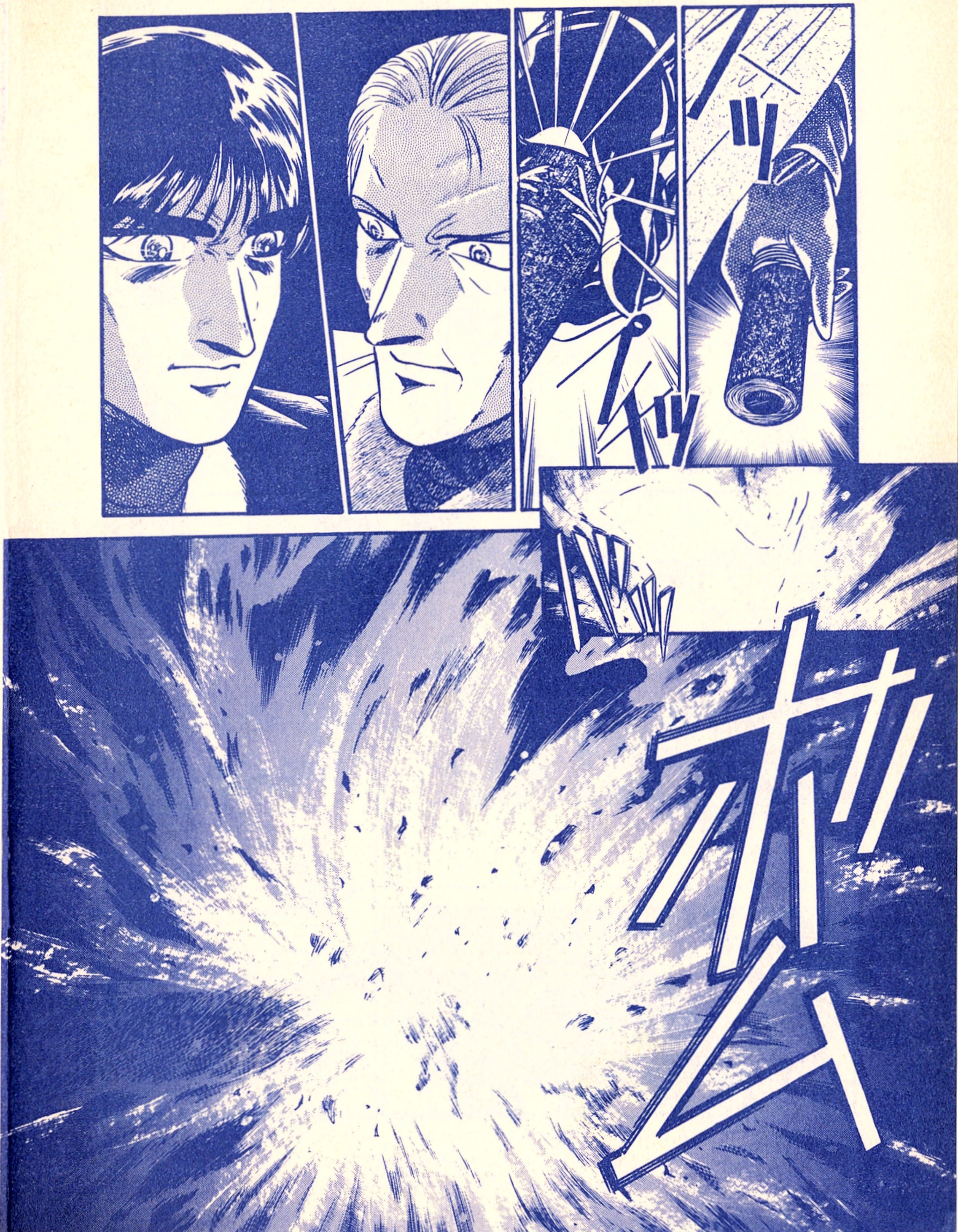

ショウ──
すでに去った
い、今のは──
この牢人が使ったのが「鳳龍爆裂波」
「気」を凝縮して敵に叩き込むロードの剣術に近いもので
比較的に初歩の技術だが──
並の力量の持ち主が使うなら一度が限界だな──
二度用いれば良くて「灰」悪けりゃ「消失」
ゲエッ

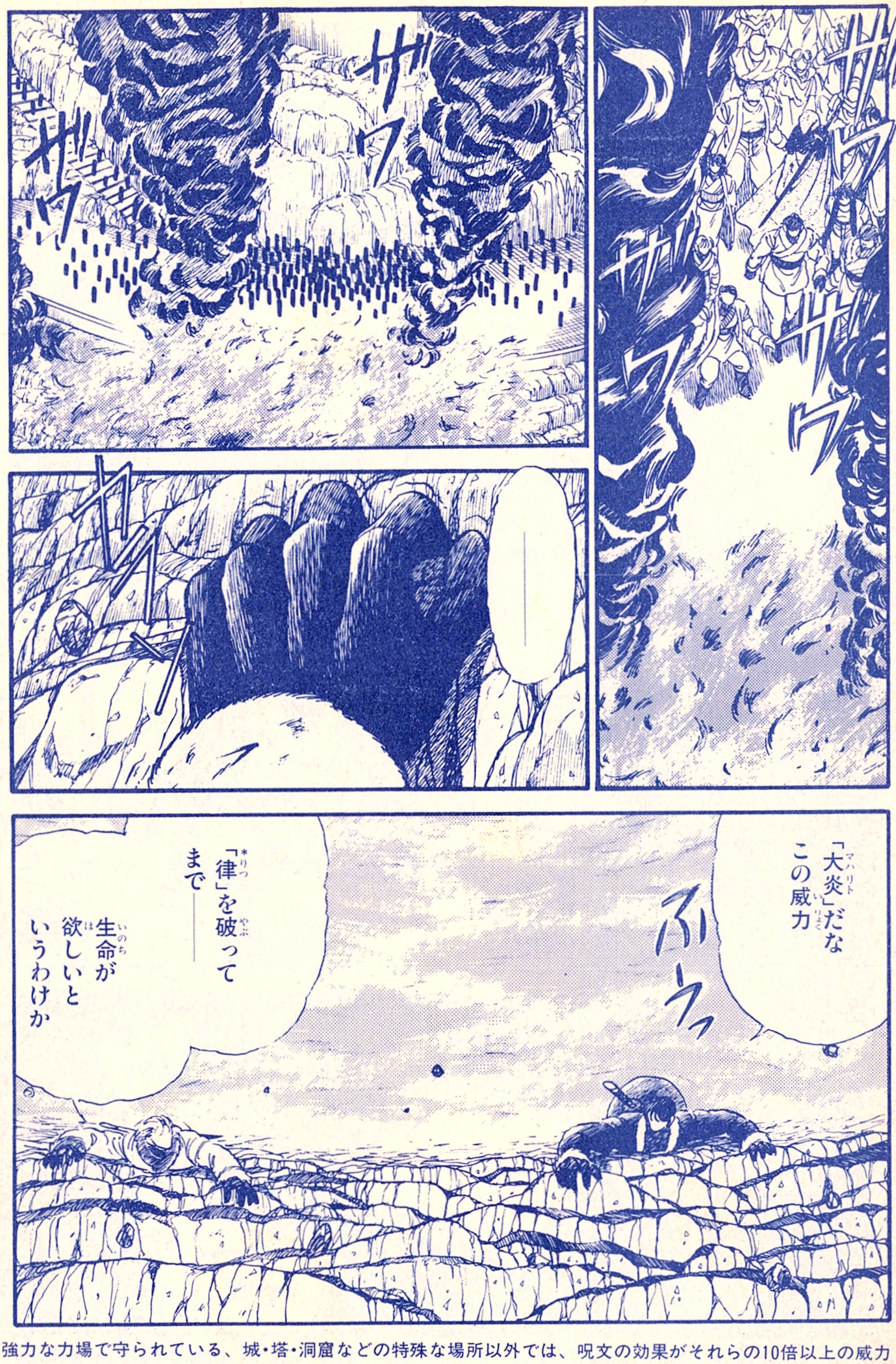

その後で牢人を切り刻んだ剣術は
「鳳龍旋風斬」剣圧で周囲に真空を作り上げ――
「気」で操り真空で相手を斬り裂く
難度の高い技術の一つだ
この時代に来て――ホウリュウ家自体はすでに断絶――
その剣術を伝える者も現在は跡断えたと聞いていたけど――
まさかショウ
お前以外にもう一人
そうらしいな――
しかもおれ達を狙ってる


いや――
狙われてるのは達じゃなくてたぶん――
スッ
おれだな
ヒダカミの国

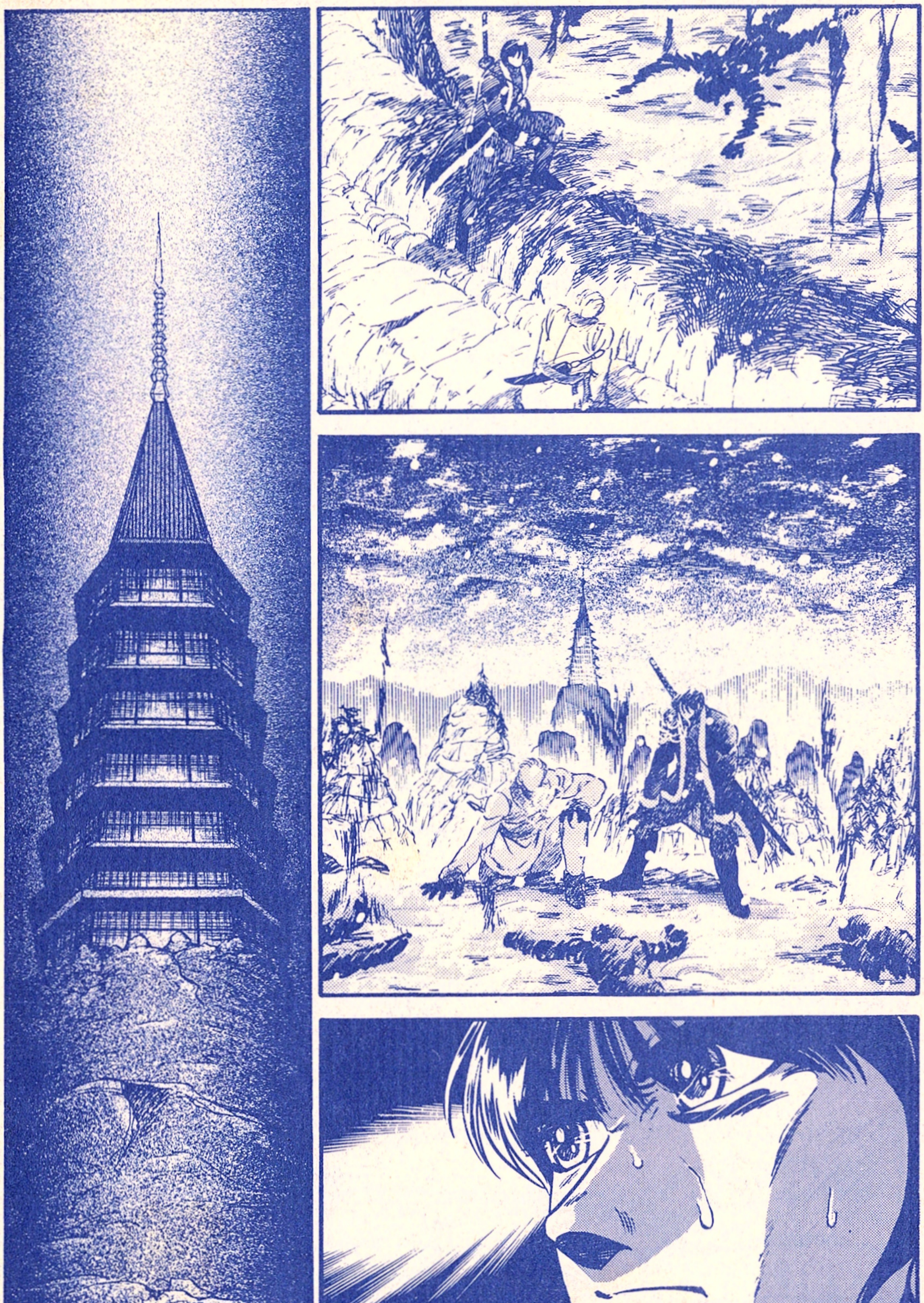


ここに来るのは二度目だが――
本当秘境だな――
ここまで来るのに丸一カ月だもんな
どうやら例の情報もずいぶんと隣国に洩れたらしいな
「クサナギ」は「ホウライ」全体の宝だからな
例え「ヒダカミ」の領地内であっても求める者を拒むことはできないのさ


ボム



＊強力な力場で守られている、城・塔・洞窟などの特殊な場所以外では、呪文の効果がそれらの10倍以上の威力を示す。そのために戦争時以外の通常時、市街地・屋外で攻撃呪文を唱えることは禁忌(タブー)とされている。不文律であるが犯した場合の罪は、「死」を与えた上に寺院に無期収容である。



めざすは鳳凰の塔!!ショウとサンザをそこで待つものとは!?

vol.7(3月16日発売)につづく!!(次号は1回お休みです)


Wizardry
ウィザードリィ外伝第1部
ギルの迷宮
石垣環・作
予価900円(税込)
ホウライ国の若き侍・ショウとリルガミンの姫将軍
ルーシィティティの宿命の戦いが始まろうとした瞬
間。2人の身体は奇妙な迷宮へと転移させせられる。
彼らは、邪法を用いこの世界の平衡を乱そうと企て
る魔導士ギルを斃すために、ここへ召喚されたとい
う。ギルとの闘いがいよいよ始まる！乞うご期待！
(巻末特集/ウィザードリィ友の会ベスト編!)
2月26日発売決定！
JICC出版局 ☎03-234-4621

TVゲーム世代のためのスーパーブックガイド

この本を読め!!

by柴尾豊太郎

第一回『黒いユニコーン』
テリー・ブルックス著　ハヤカワ文庫FT

異世界に逃げりゃすむってわけじゃない!

ファンタジーが現実逃避なのか、現実逃避がファンタジーなのか。

たしかに人間生きていれば、つらいことがすごく多いものだけど、だからといってワイバーンやドラゴンが闊歩する、剣呑きわまりない世界へ逃げ込むなんて物騒な真似はなかなかできない。常識からいってもそうでしょ。

ところが、その手の物語は非常に多い。

セーラー服もまぶしい美少女が、スポーツマンタイプの男の子に失恋して剣と魔法の国へ行ったり（うーむ）、いじめっ子にいじめられた男の子が、ドラゴンを手なずけたり（おやおや）と、世にファンタジーの種はつきないかのように思えてしまう。あえて言うなら〝夜逃げ型ファンタジー〟とでも言えるかな。

とくに、国産のファンタジー（コミックスも含めて）で、非常に多くの夜逃げ型が見られる。

ま、はっきり言ってしまえば、世の中に氾濫するこの種のお話の大部分がくずも同然。「ああ、またか」の一言でかたずけてかまわないものばかりだ。

ファンタジーでもっとも肝心なのは、異世界の構築力であって、主人公がどこから来たかなんて言う問題は二の次なのだ。

作家の立場から言えば、主人公を現代の人間にすることで、読者に等身大のキャラクターとして、感情移入をさせやすくしているつもりなんだろうけど、その程度のことで、安易に夜逃げ型にしないでほしい。

むかし、ゼラズニイという作家がいて、いかにも夜逃げ型のお話を書いたところ、評論家などのうるさ型から、総すかんをくってしまった。「FUCK！　それなら、目にもの見せてやる」なんていったかどうかは知らないけど、それから一念発起して、ものすごい続編をつぎつぎと発表していった。今度はさすがの評論家の皆様も手放しで褒めちぎったとさ。

これが、名作〝アンバー・シリーズ〟誕生秘話だ。

それなりに力量のある作家なら、たとえ夜逃げ型の話だって大傑作にできるってことだ。

大傑作かどうかは知らないけど、読めば確実におもしろい、夜逃げ型ファンタジーのシリーズ二作目が上梓された。〝ランドオーヴァー・シリーズ〟の二作目「黒いユニコーン」だ。

前作「魔法の王国売ります」では、最愛の妻を喪い、失意の生活を送る弁護士、ベン・ホリデイが、一流百貨店ローゼン社のクリスマスカタログで目にとめた魔法の王国ランドオーヴァーを百万ドルで買い取ってしまう。（堂々たる夜逃げ型でしょ）ところが、この王国、売りにだされているだけの理由があって、とんでもない秘密があったんだ。

二作目の「黒いユニコーン」では魔術師との対決を中心に、主人公、ベン自身の成長が語られるんだ。

ある意味では、夜逃げ型の形を真正面に見据えた話になっている。一流のストーリーテリングで、ぐいぐいと引き込まれてしまうシリーズだから、読めば確実に楽しめることうけあいだよ。



→「黒いユニコーン」テリー・ブルックス著、井辻朱美訳、ハヤカワ文庫FT―33（560円）かつての弁護士仲間が危地に陥っている夢を見たベンは現実世界、シカゴへ…。だが、この旅は彼をはめる魔術師、ミークスの罠だったのだ。さらに謎の黒いユニコーンの秘密もからみ、物語は意外な展開をする。

●筆者紹介／昭和37年生まれ　福岡県出身　私鉄沿線の一室で本とLDを貯めこむことが生きがいのフリーライター。

DRAGON LORE
最後の竜に捧げる歌II

SCENE①
真実の都



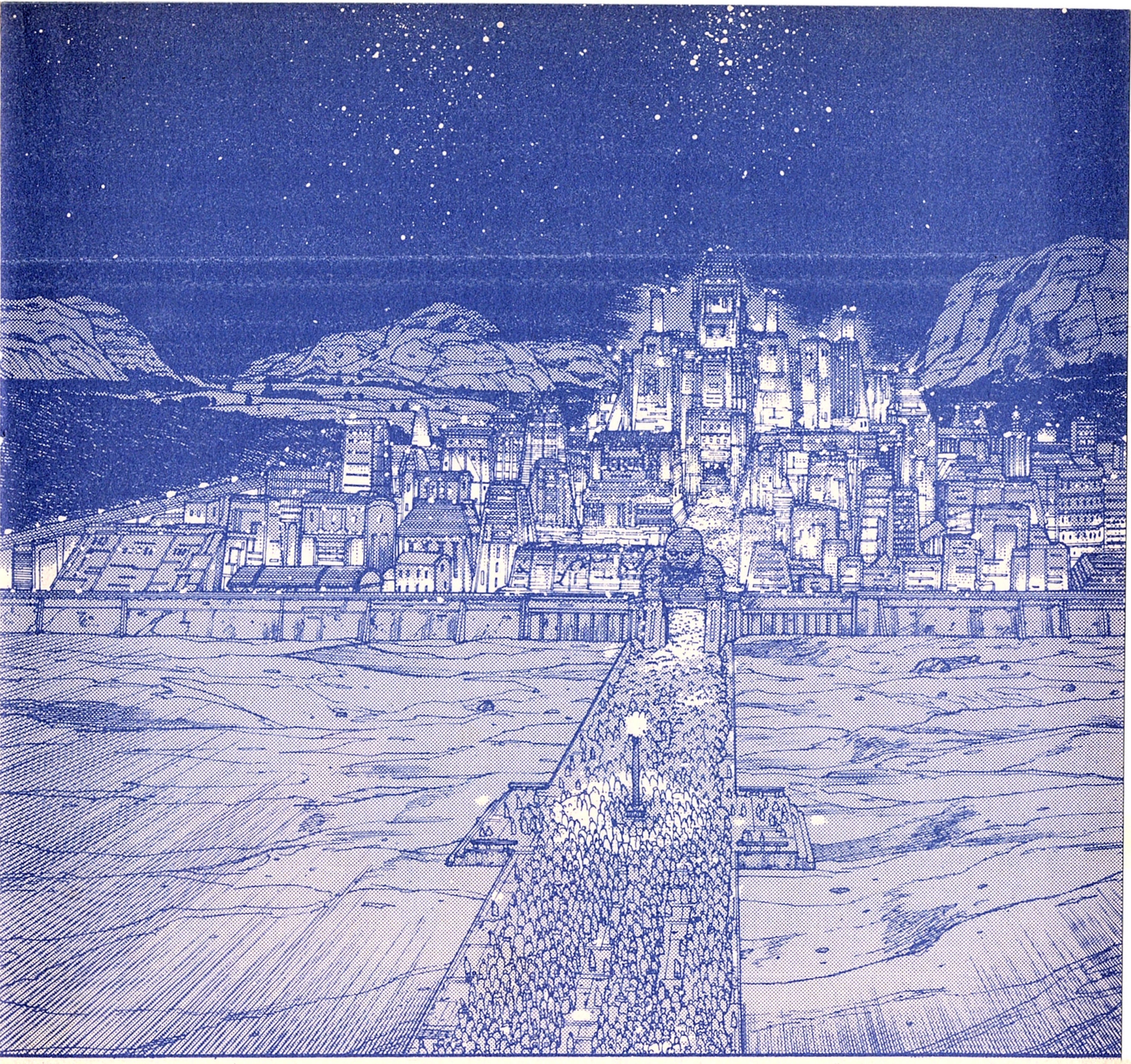
新連載開始!!

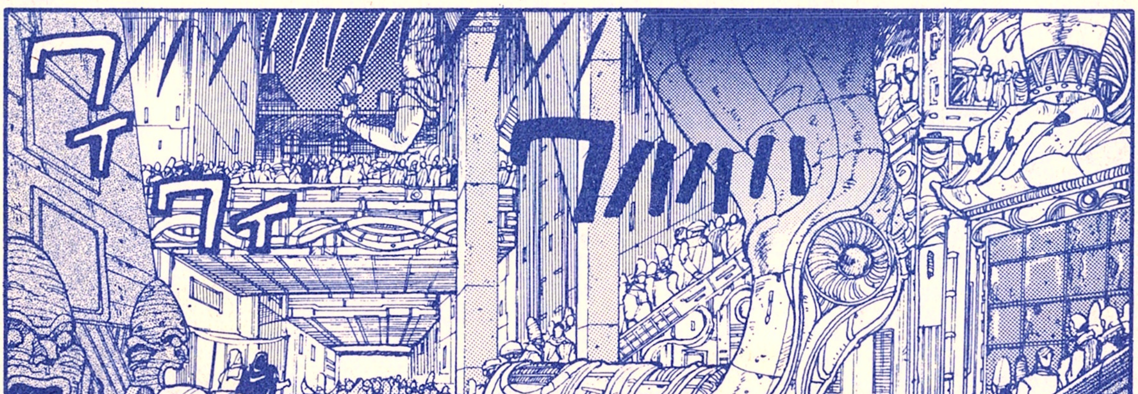
妖精族のシーマ、女魔法使いグレイの新しい冒険が始まる!!

by 外園昌也
原作/手塚一郎

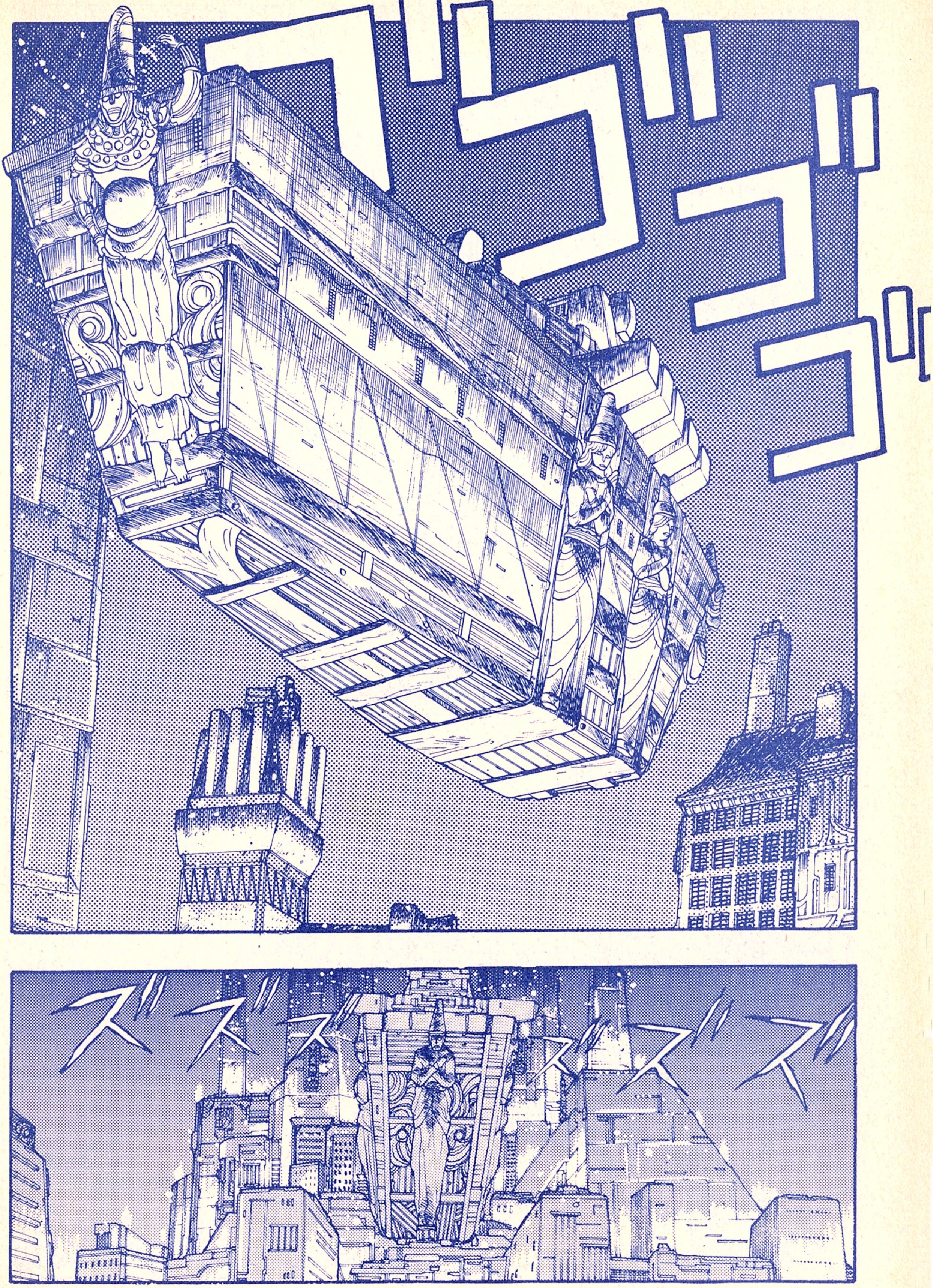

神って なんだろう――
僕が、つぶやく
その答えは きっと 私たちの
心の奥に――
君が、ささやく……
僕は うなずく――
そう

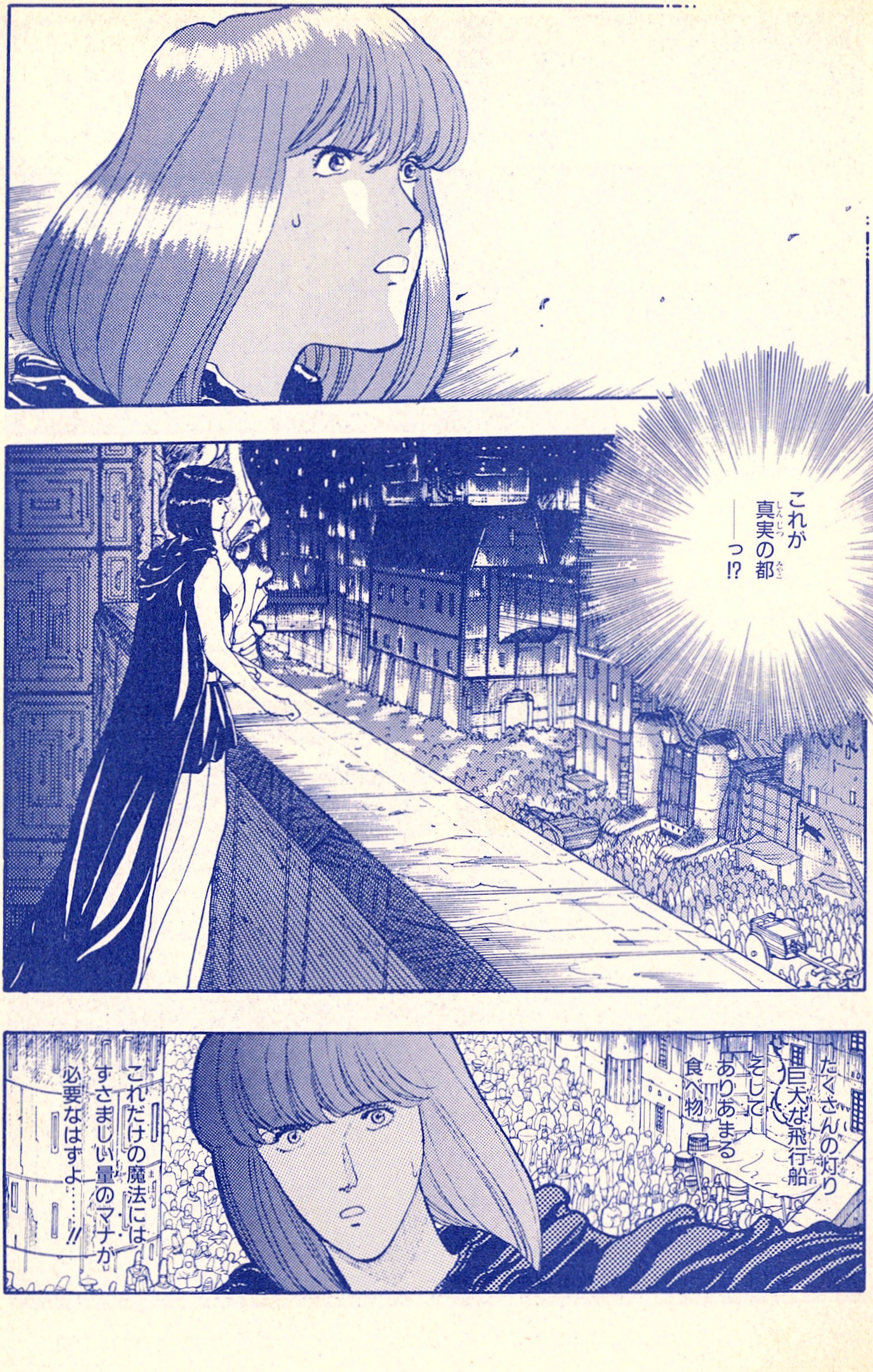

いつか
いつの日か 必ず
僕たちは、その答えを手に入れる
時が 来る
神の ほおに 手を ふれる瞬間が
やって 来る
そして
それが
それこそが、竜の伝承なんだ……




ワイワイ
ワハハハ


おーい
酒くれーっ
酒ーっ!!
まったく
この都は
すごいぜ!
ドドド…
酒も
食い物も
山程ある!
それも
特上のばかりだ!
いったい
どうなってんの
この都は?
この不景気
によー!
うふふ
教えて!
食糧は
全て魔法で
まかなってんのよ
なぜか
この〝真実の都〟には魔法の力が
たんまり残ってんのよ!


ヴゴゴゴ
ズズズズズズ


これが真実の都——っ!?
たくさんの灯り 巨大な飛行船 そしてありあまる食べ物
これだけの魔法にはすさまじい量のマナが必要なはずよ……!!


いったい
どうなってるの
この都は——!?
ズズズズ


ゴゴゴゴゴ
ヴァルハラの木が
去った後も 大喰らいは 止まらなかった……
大喰らいは ヴァルハラの木の根から
吹き出した ものでは なかった
ただ、そう 見えて いただけだったのだ……
私、グレイ・サバト は シーマと 2人
大喰らいを止める 術を さがす旅に出て
すでに 1年が 過ぎていた……


うっ
うっ
うっ
ううっ
そうですか
まだ あの子は……
シーマは私の事を
覚えていてくれ
ましたか……
ええ
1日も忘れた事は
ないと いって
ました……

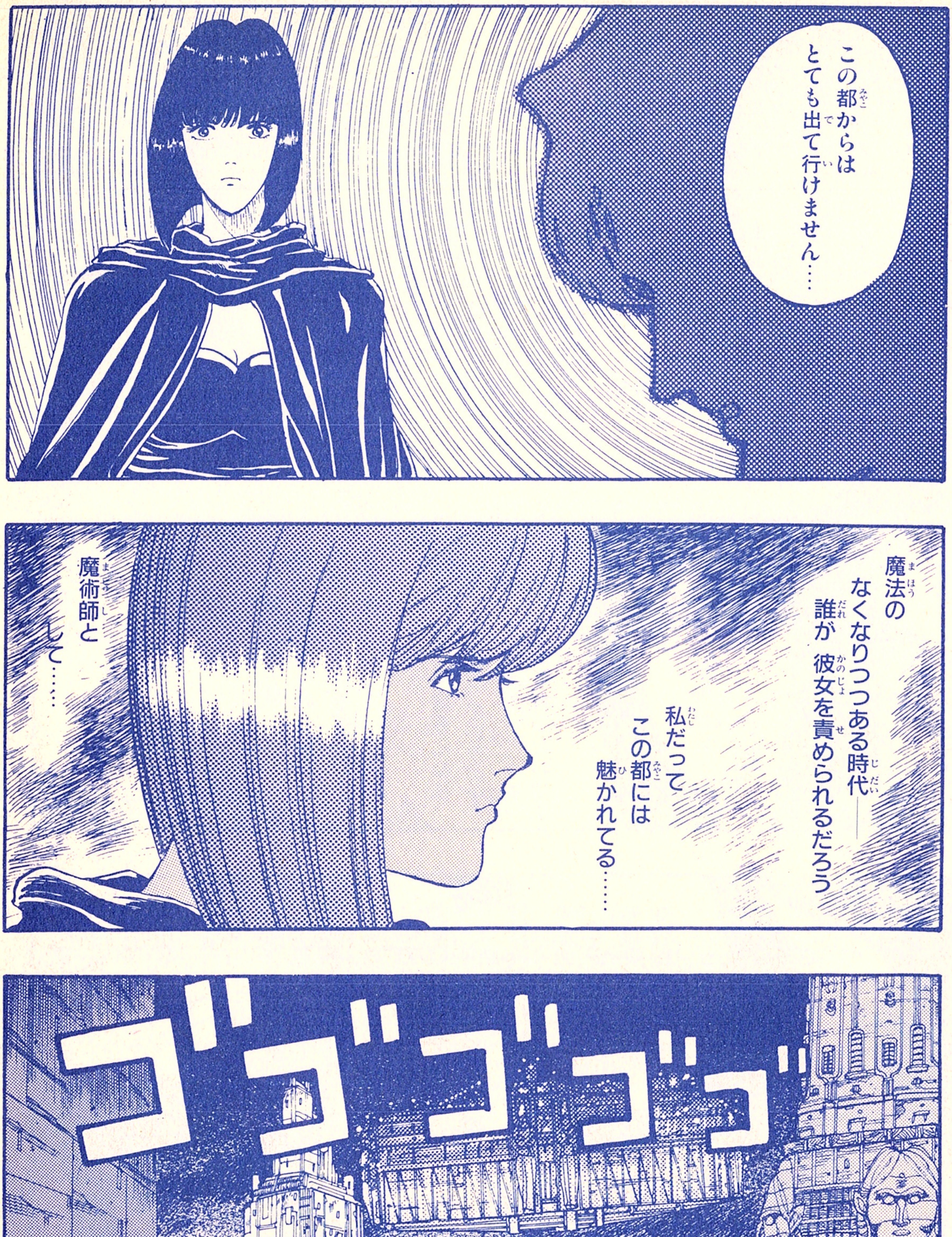

シーマは元気でいますか
ええ 今 私と共に 大喰らいを止めるための旅を続けてます
今夜は、この都の外で私の帰りを待ってます
ダン
会いたい!
おおお シーマ!
シーマは妖精なのに なぜ人間であるあなたは 育てられたんですか?
それに、どうしてシーマは、あなたを1人 ここに置いて 行ってしまったのか よろしかったら教えていただけませんか?
…………
シーマは・・・取りかえっ・子なのです!


取りかえっ子!?
妖精たちは 時に人間の子供を愛玩用にさらい 代わりに自分達の子供を置いていくのです
私の子供の代わりに置かれてあったのが あのシーマなんです
エルフ達が なぜそんな残酷ないたずらをするのか 人間の私共には理解できません
はじめは 私共夫婦は悲しみにくれました しかし 取りかえっ子とはいえ お乳を求めて泣くシーマが いつしか 私には愛しくなったのです
そんな私を主人はなじり やがて どこかへ出ていきました
それでも私は シーマを我が子として愛しみ育てたのです
しかし ここは“真実の都”——!

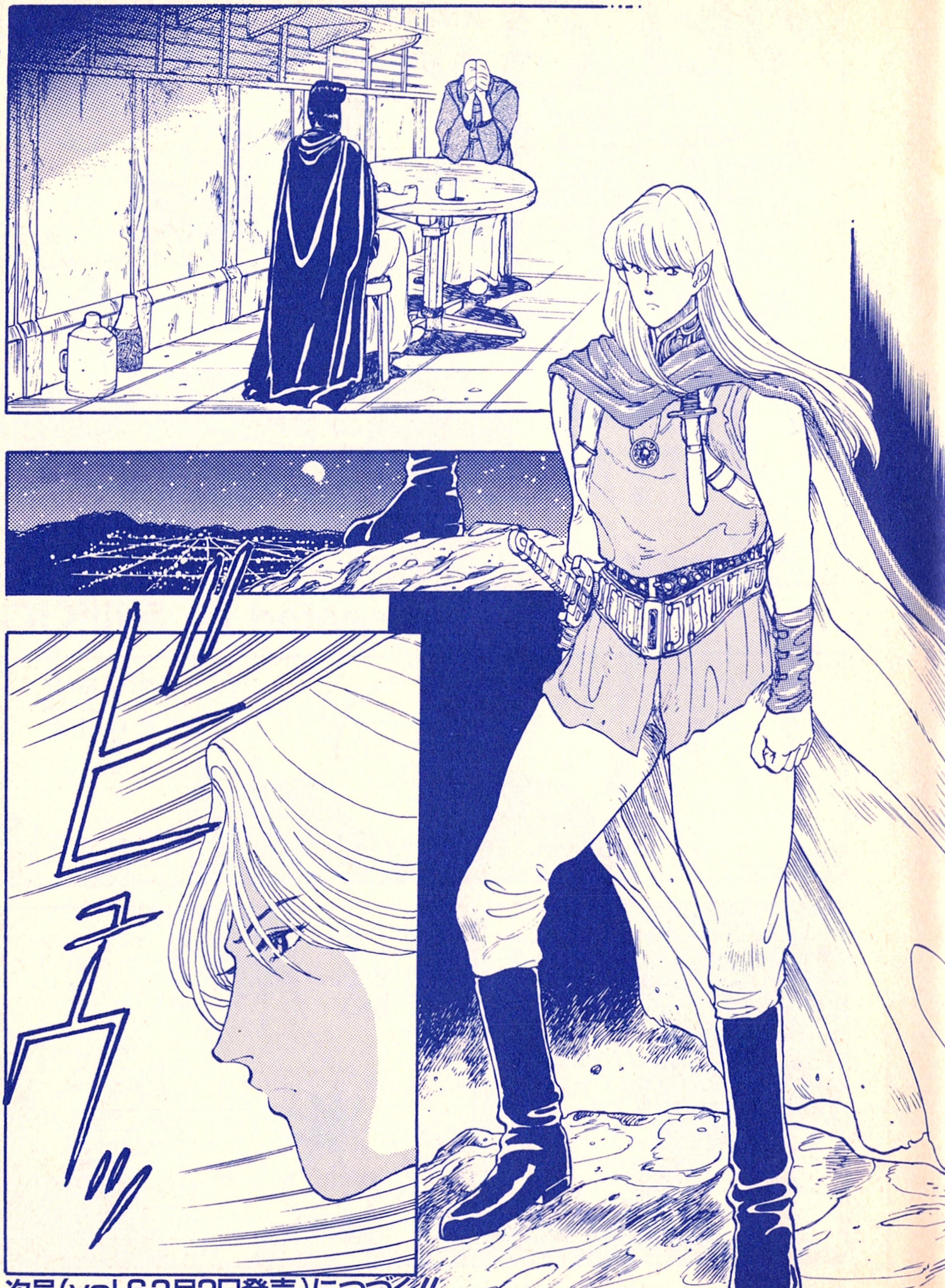

この都には
〝真実でないものは
この都にはいては
ならない〟という
法律があるのです
私が取りかえっ子で
あるシーマを育てる
事は その法に
ふれるのです
そんな
ばかな!!
エルフの
とがった耳を
帽子でかくし
金色の瞳に
色ガラスをかぶせ
人に気どられぬよう
それは 苦労して シーマを
育てました
しかし——


エルフの成長は人間のそれとは違います！
あっ
エルフはわずか3年で成人し
それ以後200才まで　その姿を保ち続けます
こればかりは私にも　どうにもできなかった……！


やがて 全てが 明るみに出ました
家に役人がやって来ていいました この都を出るか それとも処刑されるか……と
この都で生まれ育った私達は 外の世界では とても生きていけません
シーマはそんな私を 知っていたのでしょう 1人で 黙って出て行ったのです
え？
なぜです？ なぜ 外では 生きていけないのです!?
そこまで 強い あなたが なぜ
——!?
あなたも この都を見て 気付いたはずです
この都では まだ魔法が生きている！
魔法の恵みで 灯りが灯され 船は飛び 食物が、得られる！


この都からは
とても出て行けません……
魔法の
なくなりつつある時代――
誰が 彼女を責められるだろう
私だって
この都には
魅かれてる……
魔術師と
して……
ゴゴゴゴゴ

妖精族(エルフ)のシーマに秘められた過去。グレイとの冒険のゆくてには!?

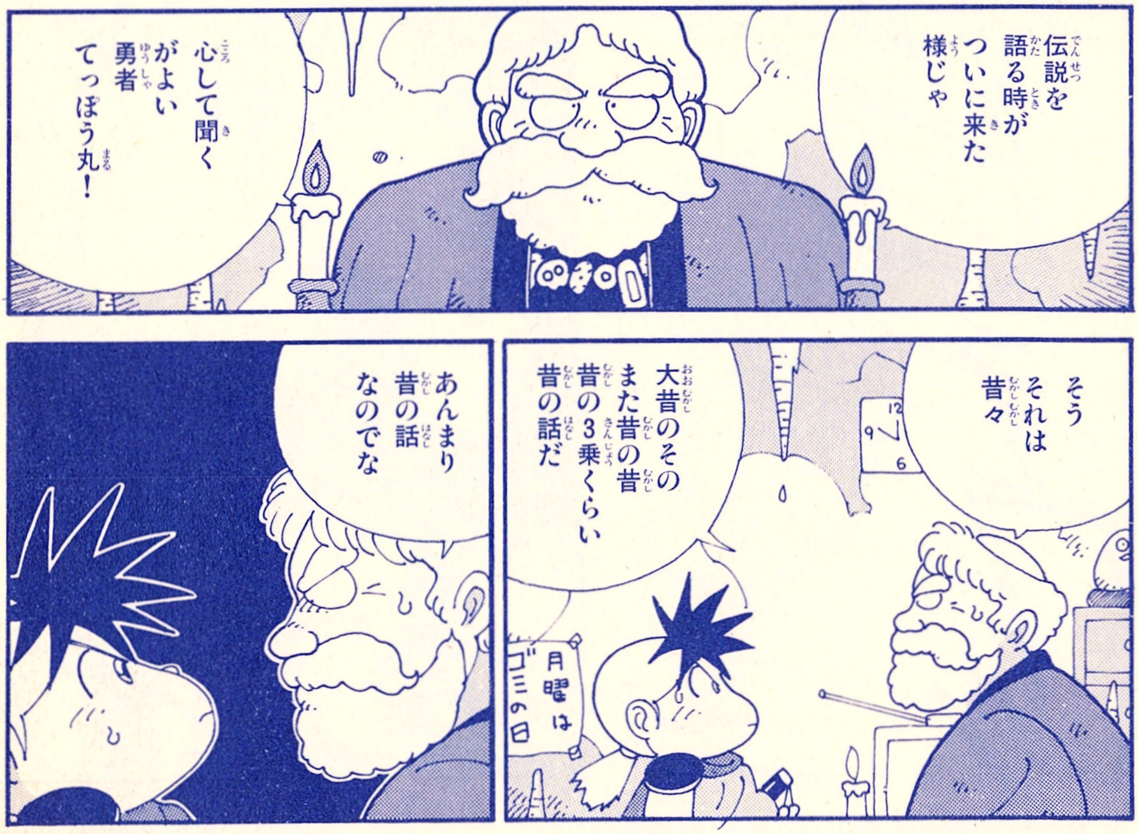


次号(vol.6 3月2日発売)につづく!!



アホは世界を救えるか!? 究極のRPGギャグがスタート!!

Presented by 品川KID





わすれてしもうたわい
ハッ
ハッ
ハッ
ハッ
はっはっはこーの
ハッ
ボケ老人が!!
ボゴッ
師しょうをぶんなぐるとは
何事じゃーっ
ブン
ギーン
ギャッ
ドーン
奥技
テトリス剣
ガシン
ガシン



次号につづくかどーかは神のみぞ知る!!はい。

風よ。龍に届いているか

第10回

迷宮より帰還した熟練の善僧アルタリウス。
しかしそれはもはや人ではなかった――。
闇より這い出でし悪夢が
聖都の王宮に現実となって襲いかかる。
妖獣との死闘の幕が今、切って落とされた。



作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第十章〕妖獣

ホールは、怒号飛び交う叫喚の坩堝と化していた。

そいつ——アルタリウスどころか、もはやノームとすら呼べぬ怪生物——が自らの首を引き剝がす凄惨な光景を目の当たりにして、女王の護衛兵は恐慌状態に陥っていた。

王室直属の衛士隊は、リルガミン王国軍兵士として訓練を積んだ者の中から剣技や知性、そして忠誠心に秀でた者を選り抜いたエリート部隊だ。たとえ十倍の数の暗殺者に囲まれたとしても、臆することなくその身を呈して女王を護り抜くだろう。

だが、それは人間相手の話だ。

連中のほとんどは、これまで一度も怪物の類を見たことがなかったのだろう。まして化物相手の戦闘を経験した者など、この聖都リルガミンの兵士にいよう筈もない。

そんな者たちが、たった今までアルタリウスだと思っていた人物が己の頭部をもぎ取るさまを見たのだ。しかも、そいつはまだ生きているときてる。

優秀な兵士と言えど、恐怖とおぞましさで正気を失ってしまうのは無理からぬところだ。

この状況下で、冷静に行動に移ったのはザザとディー、それに俺の三人だけだった。

首から上を失ったそいつは、何事もなかったようにホールの中央に立っていた。

アルタリウスの生首は、その胸の前に両手で抱えられている。

信じられぬ怪力でむしり取られたため、ピンク色の筋肉が伸びきって裂け、顎の下の断面からだらしなくぶら下がっている。が、サーベルに首筋を切り裂かれた時と同じく、出血は全く見られない。

ぎらついた眼を見開いたまま、ノームの生首は笑みをへばりつかせていた。まるで、胴と離れてしまったのが嬉しくてしようがないというよ

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山"スケイル"に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。

探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護竜ル ケブレスの護る最上層を残して全て踏破された。使命の達成は目前であった。そしてついに、主人公ジヴラシアのグループであるガッシュ、マイノスらの善のパーティが最上層の探索に出発したのだった。

しかし翌朝、一行は消息を絶った。捜索隊が急ぎ組織され、ハイランスの指揮する三隊の善のパーティが迷宮へと向かう。一方身動きの取れぬジヴラシアらは王宮に召喚され、王国の統治者ベイキ女王との謁見を行っていた。そこに迷宮より生還した善のパーティのひとりアルタリウスが現れるが、それはすでにアルタリウスではありえぬ奇怪な生物と化していたのであった——。

主な登場人物

- ●ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の"俺"。
- ●ガッシュ………レベル15の戦士。中立・人間族。
- ●ザザ……………レベル13の 僧侶 悪・人間族。
- ●ディー…………レベル13の女魔術師。悪・エルフ。
- ●マイノス………レベル12のロード。善・人間族。
- ●フレイ…………レベル13の盗賊。中立・ホビット。
- ●ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
- ●アルタリウス…レベル13の僧侶 善・ノーム。
- ●エレイン………レベル13の魔術師。善・エルフ。
- ●ハイランス……レベル13の侍。中立・エルフ。他のパーティを率いる。
- ●ベイキ女王……リルガミン王国の若き女王。
- ●ル ケブレス……迷宮を支配する龍。"平衡の守護者"。

うな、狂気に満ち満ちた表情だ。
生半可な悪夢では太刀打ちできない、生理的な嫌悪感を催す眺めだった。ベイキ女王がまだ失神していないのが不思議なくらいだ。
「どきなっ！　燃やすよ！」
混乱しきったホール内に、玉座近くに後退したディーの怒声が響いた。その叫びに何人かの衛士が恐慌状態から立ち直り、慌ててホール中央付近から離れる。
玉座から見て右手に移動した俺はいつでも攻撃に移れるように構えを取っていたが、アルタリウスを挟んで反対側に回ったザザと素早く視線を交し、その姿勢のままで動きを止めた。ザザも油断なく構えているが、呪文を唱える気配はない。
立ちつくしたまま動きを見せないアルタリウスは、強力な殺傷力を持つ魔術師の中規模範囲攻撃呪文の恰好の的になる。俺たちは、まずはこの正体不明の化物をディーの呪文に任せることにしたのだ。
ホールに、呪文の詠唱が短く反響した。
呪文の最後の一節が発されたその時、アルタリウスが動いたかに見えた。
次の瞬間、俺の視界が黄白色の閃光に染まった。
続いて熱風がホールの中央から吹きつけてくる。
地の底の業火が噴き上がったかの如くに、直径六メートルばかりの炎の渦がアルタリウスを包み込んでいた。
魔術師系第四レベルの攻撃呪文・猛炎だった。魔力によって高熱の炎を生じさせる火炎系魔法の高位呪文で、人間程度の大きさの生物なら即座に回避行動を取らない限り、ものの数秒で皮膚を炭化させるだけの燃焼エネルギーを有している。ディーが最も得意とし、好んで用いる呪文だった。
淡い黄色の炎が、アルタリウスを中心に高速で回転していた。
文字通り、渦そのものだった。自ら周囲の空気を取り込み、加速的に燃焼力を高めていく生きた炎だ。
発火して約三秒、そいつはまだ炎の外に飛び出してこない。このまま火炎の有効範囲に留まり続けていれば、恐らくはあと数秒で小柄なノームの肉体は半ば消し炭と化すだろう。そうなっては、奴の正体が何であれ生命を維持できるとは考えられない。
ディーはすでに勝ち誇った笑みを浮かべていた。
ベイキ女王の前で、自分の呪文の力を見せつけてやれたのが小気味良いのだろう。白い肌がわずかに上気し、このエルフの美しさを際立たせている。
だがその刹那、炎の中で黒い影が揺らめいた。
はっとたじろぐディーに向かって、炎の壁を突き破って何か小さなものが飛び出した。
煙の尾を引きながら宙を飛ぶそれは、皮膚がただれてめくれ上がり、眼球は熱で白く濁りながらもなお嗤い続けている生首だった。首なしのアルタリウスが投げつけたのだ。
ディーは短い悲鳴を上げてつっ伏した。その上を生首がかなりの勢いで通過し、気絶こそしていないものの自失状態にある女王が立ちすくんでいる玉座の前に落下する。
その間に、本体は炎の中から抜け出していた。
前後左右どの方向でもない。奴が逃れたのは、上だった。炎の舌先が届かぬシャンデリアの中心に、黒焦げのそいつが四肢を絡みつかせて張り付いていた。
凄い跳躍力だった。床からシャンデリアまで、垂直に五メートル以上もその肉体を跳ね上げたのだ。
炎の渦が、瞬時に消失した。魔法の炎は呪文効果の持続時間が切れると同時に跡形もなく消え去るのだ。
衛士たちはこの炎が視覚に与えたショックによってパニックから脱していたが、半ば炭のようなそれがシャンデリアにぶら下がって蠢いているのを、いまだ声もなく見上げている。
それが身じろぎする度に、炭化した表皮がぽろぽろと剥がれ落ちる。まるで漆黒の翅を持つ巨大な蛾が、そこで鱗粉を撒き散らしているかのようだ。

低い詠唱が、いつの間にか始まっていた。

僧侶呪文特有の韻律を踏んだ、太く唸るような詠唱だ。

ザザの印を結んだ両手が、胸の前で複雑な軌跡を滑らかに描く。その右腕が奴に向かって突き上げられた瞬間に、唐突に詠唱が終わった。わ同時に、もはや人型にも見えぬそれが雷に撃たれたかのように激しく痙攣した。

僧侶系第五レベルの攻撃呪文・大滅を唱えたようだった。見かけは地味だが、相手の生命力の流れを逆転させて大幅に体力を奪う強力な呪文だ。ただし効果範囲が極めて小さく、単体にしか影響を及ぼさないという欠点を持つ。ザザが以前一度だけ使用した際に、そんな話を聞かされた覚えがある。

二、三度微かに身震いすると、それは耐えきれずシャンデリアから離れ、背中から床に落下した。

濡れた雑巾を叩きつけたような音が響いた。炭化した細胞が黒煙のように舞い上がり、それの姿を包み隠す。

数秒後に黒煙が薄れた時には、それはもう動いてはいなかった。猛炎と大滅の洗礼を受け、さしもの化物もどうやら絶命したらしい。

静寂が訪れた。

俺は焼け焦げた屍にゆっくりと近づいた。

熱で縮んだのか、もともと小さなノームの肉体がさらに矮小になっていた。衣服は完全に燃え尽き、ほとんど全身の皮膚を焼き焦がされたそれは、あちこちから生焼けの白く崩れた肉を覗かせている。指などは骨まで炭化したらしく、手足はただの棒のようだ。

この状態で、ザザの大滅を受けるまで生命活動が停止しなかったこと自体驚きだった。邪悪な魔力により擬似生命を得た屍——不死怪物だったとしても、これだけの火勢で焙られれば邪気を断ち切られるものだ。それにアルタリウスの、あの異様な精気を孕んだ眼と、サーベルに向かって突進した際の瞬発力は、断じて操られた屍の持ち得るものではなかった。

死体の前までできた俺は、しゃがんでそれを調べようとした。アルタリウスを模したこの生物の正体を確かめたかったのだ。

だが、俺はその動作を途中で止めた。

こいつはアルタリウスに化けていたのではない。確かに、本物のアルタリウスだったのだ。それが操られていたとなると——。

遅まきながら、屍から発散する強烈な殺気に俺は気づいた。

すぐさま、あらん限りのバネを生かして後方に跳びすさる。

その瞬間、死体の腹がぱくりと割れた。そこから俺を追うように、ぬめりを持った緑色の鞭のようなものが繰り出される。

鞭の先端には、長い四本の指があった。

「ちいっ」

俺は自分の迂闊さに舌打ちした。死んだように見えたとはいえ、手の内を読めぬ魔物に無警戒に接近し過ぎた。

俺が後退する速度より速く、緑の触手が顔面目がけて伸びてくる。体勢を立て直している暇はなかった。無理な姿勢から、俺は思いきり右脚を振り上げた。

ブーツの爪先が迫ってくる触手を捉え、蹴り上げる。化物の腕が上方に逸れ、俺はバランスを崩して後ろに倒れ込んだ。が、その勢いを殺さずに後転し、間髪を入れずに立ち上がる。

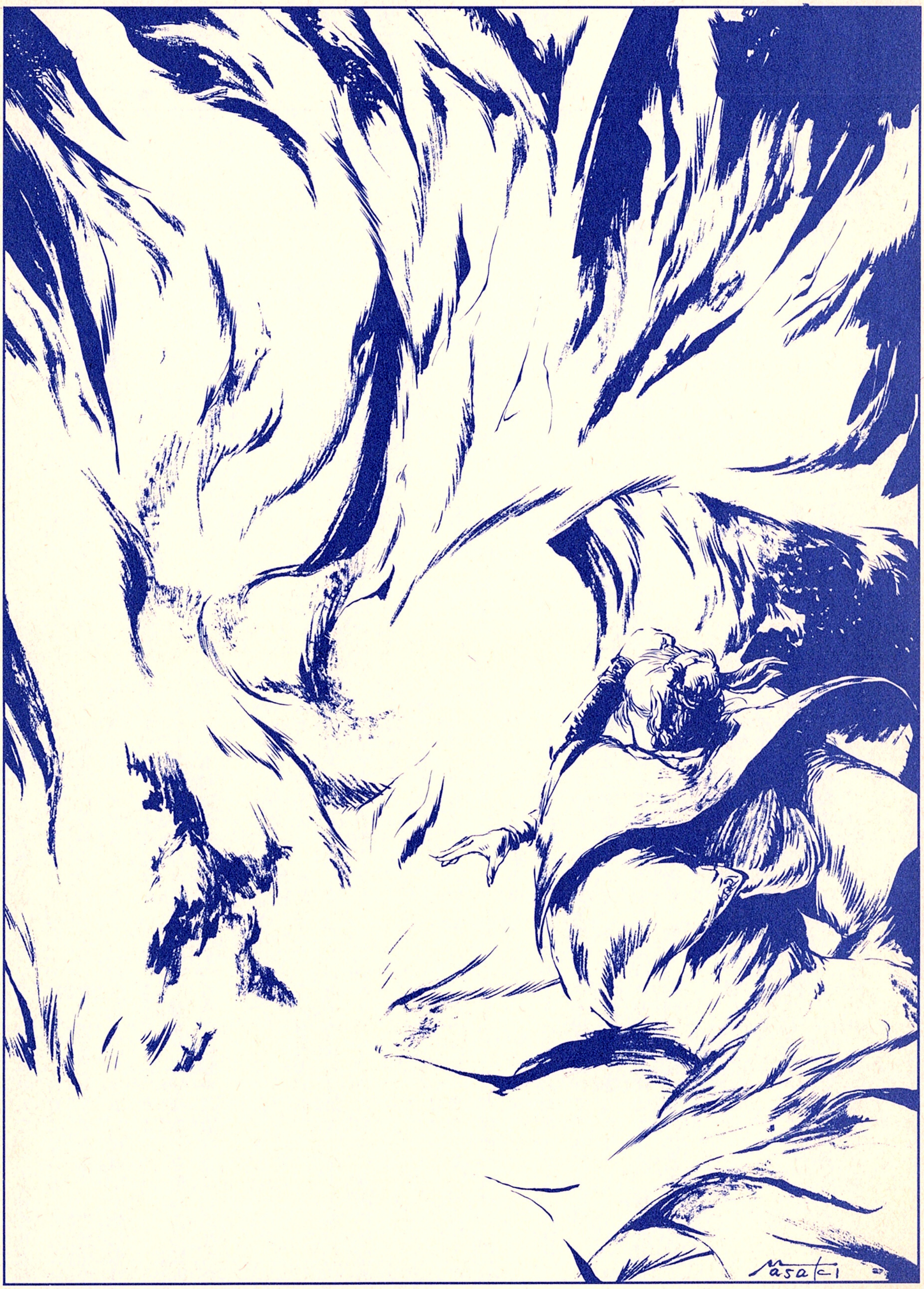
死体の腹に開いた穴から緑の触手に続いて、ぶくり、と鮮やかなピンク色をした肉腫がもり上がり始めていた。へらへらと揺れる触手は、その肉腫から生え出ているのが見てとれる。

肉腫は見る間に膨れ上がり、屍の内側から溢れ出てくる。それはあたかも、焼けただれた肉体が再生しているような光景だった。

肉腫の内部からもう一本、粘液にまみれた触手が飛び出してきた。

天に向かって突き出した一対の触手は、ぐねりと曲がるとアルタリウスのものだった胴体——つまり肉腫の覗く穴の周囲に掌に当たる部分を置いた。そして触手に力を込め、本体である肉腫を仮の姿であったアルタリウスの躰から引きずり出そうとする。

緑の腕を生やしたピンクの肉腫が身をよじる度に、ずるり、ずるりとそいつが外に這い出してくるのだ。


Masaki

その姿を、何と表現したらいいのだろう。
一番近いと思われるのは、生物を袋に見立てて裏返した状態だろうか。内臓の内側の粘膜や剥き出しの肉壁を連想させる、思わず吐き気のこみ上げてくるような外見の表皮に全身を包まれているのだ。
しかし俺が知っているどんな生物とも、そいつは似てはいなかった。生物と呼ぶにはあまりにも、そいつは歪で、禍々し過ぎた。
ディーは床に伏したまま、起き上がるのも忘れて惚けたようにこの怪物を見つめていた。ザザですら、血の気の引いた顔から表情が消えている。
化物には慣れっこの筈のマスタークラスの冒険者さえも平静を保てぬほど、そいつの異常さは人の理性を蝕むのだ。
そいつが、全身を震わせて哭いた。ガラス板を鋭い刃先でこする音に似た、背筋に悪寒を疾らせる哭き声だった。
妖獣、という呼び名が最も相応しいと、俺はその時思った。
そうするうちにも、そいつは今にも弾けそうに巨大に膨れ続けている。すでにそれが潜り込んでいたアルタリウスの躰と同じか、それ以上の大きさにまで成長していた。明らかに、この妖獣は驚異的なスピードで肉体を増殖させ、呪文によるダメージから回復しつつあるのだ。
殺るなら今だと、心の中で冷静な自分が叫んでいた。
たとえるなら、今の奴は無防備な脱皮の最中だった。アルタリウスの躰が邪魔で、思うように身動きが取れない状態なのだ。猛炎と大減によるダメージも、まだかなり残っている筈だった。
他に攻撃に移れそうな者はホール内にはいなかった。ディーやザザも呪文効果を呼び起こすための精神集中を即座に行えるほど、動揺から立ち直ってはいないだろう。
俺は床を蹴った。そして、妖獣を回りこむように疾り出す。
それに呼応して妖獣の触手がふらりと持ち上がり、俺の動きを追い始める。その様子を見る限り、この化物の知覚能力は極めて高い。
妖獣の周囲を駆けながら、俺は策を考えていた。
見かけからは想想もできないほど、こいつの動きは速い。
鞭のようにしなる触手は、腕としての機能を持ちながらも伸縮自在だ。下手に間合いに入ると、先刻の二の舞になるのは見えている。
充分加速すれば触手の二本ぐらい躱し切ることもできるが、生憎床は磨き抜かれた大理石で、その上には炭化したノームの皮膚が大量に飛び散っている。全力疾走すれば間違いなく足を取られるだろう。
しかも戦闘が長引けば長引くほど、凄まじい回復能力を持つこの妖獣相手には不利になる。一撃で斃すつもりで攻撃を仕掛けなければならなかった。
俺は賭けに出た。
スピードを落とし、妖獣に向かって向きを変える。
距離は十メートル強。そして奴の触手の長さは最大二メートル。
頭の中で自分の動きをもう一度組み立てる。その間も、実際の肉体の動きは止まってはいない。
俺は突進を開始した。
一歩ごとにスピードが増していく。その一歩一歩を、俺は祈るような気持ちで踏み出していた。もし滑ろうものなら賭けは俺の負け、悪ければこのおぞましい肉腫の親玉の餌食になってしまうのだ。
柔らかい革を重ね、足音を立てぬように工夫した特注ブーツの底は、今までのところしっかりと大理石の床を捉え続けてくれていた。
正面では、馬鹿正直に突っ込んでくる獲物を捕らえるべく、二本の触手が緑の指を開いて掴みかからんばかりに待ち構えている。俺の計算が少しでも狂えば、この優秀な触手は容赦なく俺の喉頸に巻きつくことだろう。
残り四メートルで、俺は足を滑らせた。
上体が泳ぎ、つんのめるように倒れ込む。
俺の頭部が、触手の二メートル圏内に入りかける。
妖獣は待ちかねたように触手を一杯に伸ばしてきた。あと十分の一秒と待たずに、この元気の良い獲物は腕の中に飛び込んでくる——。
奴がそう思っていたなら、さぞかし残念だっただろう。
ここまでが、全て俺の計算通りなのだ。

WIZARDRY Ⅱ

風よ。龍に届いているか

倒れざま、俺は両手で床を弾き、宙に舞った。
触手が慌てて俺の動きを追う。だが、伸び切った触手は一度縮めなければ自在には動かせない。跳ね上がった俺の躰に、触手は完全に遅れを取った。
俺は宙で前方回転しながら、思いきり反り返っていた。全身の筋肉をたわめ、来たるべき瞬間に一気に力を爆発させるためにだ。
妖獣は視界に入っていなかったが、俺には自分との相対位置が手に取るように判っている。
溜めた力を解放する時が、近づいてきた。
瞬間。
全身をバネにして、俺は右手の手刀を振り下ろした。
視界をピンク色の魔物が過ぎる。
大気を切り裂く手応えがあった。
空中でさらにもう一回転し、俺は妖獣を飛び越えて着地した。
背後で、妖獣の殺気が途絶えた。
振り向くと、妖獣は今まさに頽れようとしているところだった。
肉腫状の本体に縦に亀裂が疾っていた。そこから膿色の体液が、ぐじぐじととめどなく溢れ出している。
ぺしゃ、と湿った音を立て、そいつは大理石の上に転がった。
生物ならば必ずある生命力の流れ。その集点となる幾つかの部位を俺たち忍者は"死点"と呼んでいる。ここを的確に打てば、素手の子供ですら大人を殺せる必殺の急所だ。
妖獣のその一点を、俺は手刀の巻き起こす真空の波動で切り裂いたのだ。
賭けは、俺の勝ちだった。
気を抜いたその時、ベイキ女王の悲鳴が響き渡った。

(次号につづく)

あとがき

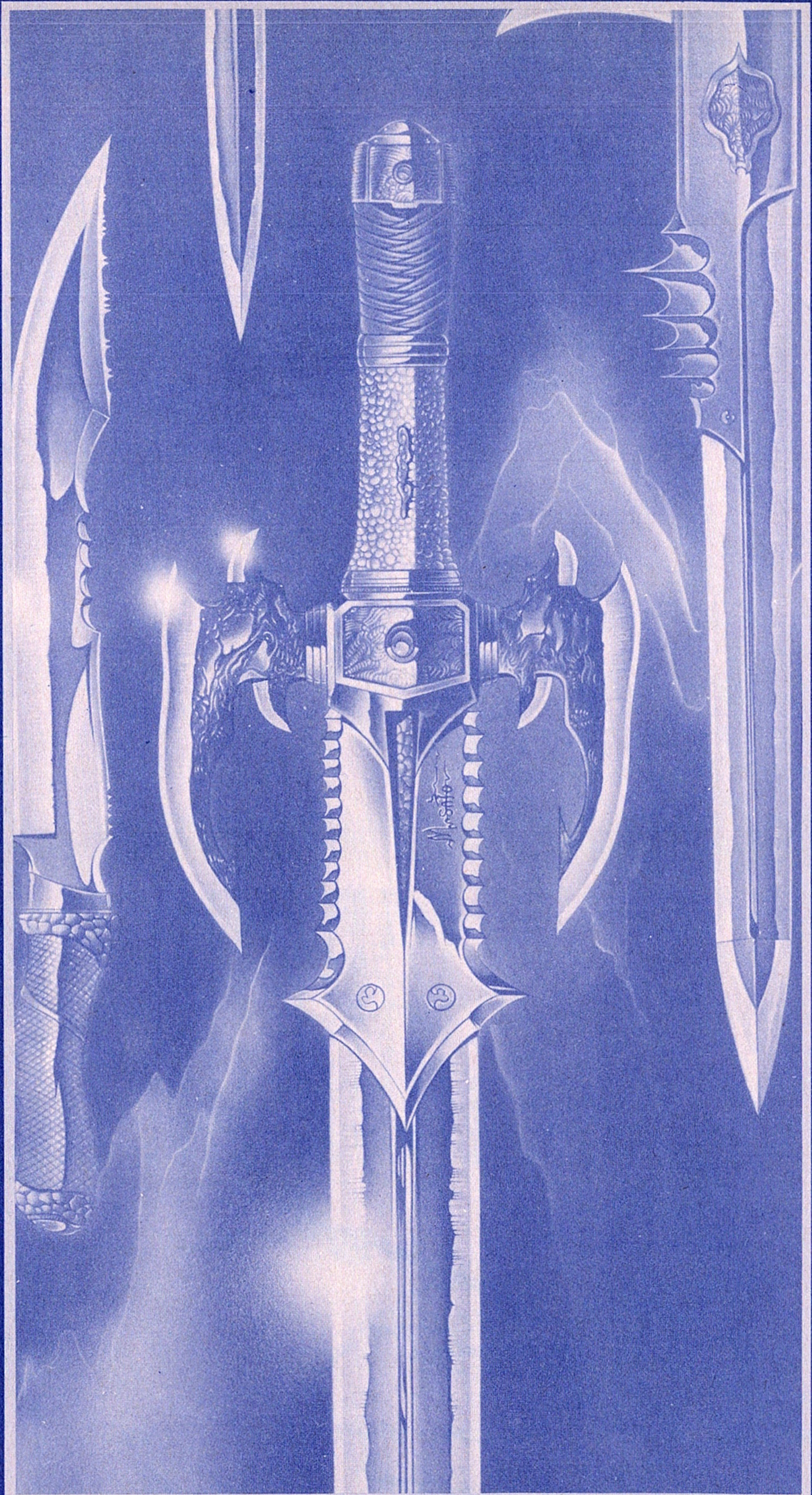
正月の三が日に、あの『LYNX』を購入した。
以前必勝本編集部にサンプルがあったのだが、たまたまその期間に編集部を訪れる機会がなかったため、噂だけしか聞いていなかった。が、バックライトカラー液晶画面にスプライト拡大機能など、かなり興味を惹くハードではあった。だから、よりにもよって新年会の帰りなどについ買ってしまったのだろう。
箱を開けてみて、驚いた。何がって、ボディのプラスチック成型がやけに粗いのだ。平面部分の表面に紋様まで浮いているあたりなどは、幼い頃につかまされた粗悪なプラモデルを思い起こさせる。とても3万円近い値がついていた代物には見えない。
もっとも、液晶を含めたハードの機能自体にはいい意味で驚かされた。昔ゲームウォッチが流行っていた頃に、こんなゲーム機ができないものかと夢見たものだったのだ。
あとはソフトが揃ってくれればいいのだが、僕は何となく流通に先行き不安なものを感じている。そもそも発売日だった去年の11月20日に、ほとんど店先に並んでいなかった。
判官びいきの質の僕は、こんな『LYNX』を応援している。ゲームボーイが慢性的に品不足の今こそ、しっかりユーザーを増やして欲しいものだ。
ただし、ゲームボーイのように液晶が切れたら承知しないぞ(笑えない)。

(ベニー松山)



特報!!
ウィザードリィ外伝①ギルの迷宮
単行本化決定!!2月26日発売決定!!

●巻末特別企画として、ベニー松山責任編集ザ・ベスト・オブ・ウィザードリィ友の会がついてきます!!お見のがしなく!!(定価九〇〇円税込)



▶ファンタジーランド
(P108)からお読み下さい。